『太玄』の「首」と「贊」について

辛　賢

はじめに

前漢の易學には、『易』の經典化が進むにつれ、解決しなければならない重要な課題が様々に現れてきた。その一つに「易と春秋とは天人の道なり」（『漢書』律曆志）という『易』が、天人相與の思想を明らかにしたバイブルであることを證明、理論化する作業があった。孟喜の卦氣說や京房の分卦直日法など、前漢の象數易學は、まさにこのような思潮の中で、當時の天文曆數に六十四卦三百八十四爻という『易』の基本的數値を組み込もうとする努力の賜物であったが、しかし、それらには牽强付會の性質を否定しきれないものがあった。[1]

『易』が天文曆法に合致した理論であることを證明するにあたり、前漢の易家が最も重視していた條件は、前漢律曆の數値と『易』の數理との合致を圖ることと、『易』のシンボルである卦爻の變化を整合的な配列システムとして組み上げることの二つであった。

揚雄の『太玄』は周知のように『易』に擬えて制作したものである。[2]その擬えた目的は、孟喜・京房以來の、天文曆法に基づく完全な『易』システムの完成を目指すことにあった。[3]『太玄』が前漢の太初曆に基づく數理によっていることはしばしば指摘されていることである。[4]しかし、卦爻の配列システムという視點からみた場合、『太玄』にはその構成上、とても整合的であるとは考えられない問題が一つだけ存在していた。それは『太玄』の「首」と「贊」が構造的に一貫していないかに見える問題である。

『太玄』の「首」と「贊」は、『易』の「卦」と「爻」の機能に對應するものであるが、その首・贊の構造を『易』の卦・爻の構造と比較すると、非常に異なっている點に氣づく。具體的にいえば、『易』の卦は、一卦に六爻と六爻辭があり、六と六で緊密に結びついているが、『太玄』の首は、四畫と九贊辭とからなり、「四」と「九」は、『易』の「六」と「六」のようにぴったりと對應しないことである。つまり『太玄』の「首」「贊」は、『易』の卦・爻のように有機的に結びつくものではなく、それぞれ何の繫がりもない無關係のもののように見えるのである。

この問題に對して、かつて津田左右吉氏は「一首に九贊を設けたのも、九の數を重んじたからではあろうが……一首に九贊があることは、易の卦の六爻の一々に爻辭があるのとは違い、畫の四重であることとも、其の畫の一もしくは二もしくは三であることとも、無關係である」と述べ、[5]「首」の四重と九「贊」とを無關係とした。津田氏以

後の研究者たちも、『太玄』の「首」と「贊」は無關係、あるいは構造的に異なる性格をもつものであるとしてきた。[6]

ところで、このように「首」と「贊」とを無關係あるいは異構造と見なす考えは、實は近年に始まったものではなかった。古く、宋の司馬光の論文「說玄」[7]を見ると、そこには「易卦六爻、爻に皆な辭有り。玄首四重なるも別に九贊を爲して以て其の下に繫く。然らば則ち首と贊とは道を分かち、行、相因らざるなり」とある。つまり、「首」と「贊」とを別系列としているのである。[8]そして恐らくこの司馬光の說以來、學者の中では「首」「贊」の異構造性が一般的に定着していったのであろう。[9]

しかし『太玄』の著者である揚雄が、『易』に倣いつつ、しかもさらにその合理性を高めようとしていたのにもかかわらず、『易』の卦爻一貫的合理性を捨て、わざわざ無關係な數理を導入しなければならなかった必然性はあったのだろうか。本稿は、この司馬光以來の「首」と「贊」の無關係あるいは異構造的把握は、果たして揚雄が本來的に考えていたものであったのかどうかを檢討するものである。

一　「首」と「贊」の不整合の認識

『易』の「卦」は陰陽二爻を基本とし、それらを六つ積み重ねた六畫（䷀）から成り、その卦は全體で六十四通り（$2^6=64$）を成す。これに對して『太玄』の「首」は、▬ ▭ ⋯ の三畫を基本要素とする。この三畫はそれぞれ天・地・人の三元を象徵するものであり、また同時に一・二・三の三數を表す。これを四つに重ねた形（䷱）、つまり四畫（上位から方・州・部・家と呼ぶ）[10]によって首ができる。首は、▬ ▭ ⋯ の三つの要素を方・州・部・家の四位に配當することによって、全體で八十一通り（$3^4=81$）ができあがる。『易』の場合、一卦の六爻に占斷を說く六爻辭が對應し、爻と爻辭は一體的な關係に結びついている。一方、『太玄』は、一首四畫は先述の通りであるが、しかし四畫に對する占斷辭である贊辭は「初一、次二、次三、次四、次五、次六、次七、次八、上九」と、合わせて九贊辭となっている。『易』が六爻・六爻辭と對應しているのに對し、一首「四」畫と「九」贊辭は數的に對應せず、『易』のような一體的な關係とはならないのである。

この問題が簡單に解決のつかない疑問であることを明確に指摘したのは、明の葉子奇『太玄本旨』原序の第三條であった。

> 夫れ易、爻以て卦を立て、辭以て爻を明らかにす。故に爻に六有れば辭も亦た六あり。今、玄畫に四有るも贊辭反って九あり。是れ上は明らかなる所無く、下は屬する所無し。首自り首、而して贊自り贊は本末二致なり。此れ求むるも未だ通ぜざる者の（第）三（條）なり。[11]

こうした疑問はおそらく相當古くからあったと思われるが、ただ、漢・六朝間の『太玄』の舊注はその多くが亡佚して今に傳わらない。[12]そして今に殘る漢の宋衷注（司馬光集注所引）も、また唯一の現存完本である晉の范望注も、首・贊の關係については、特に問題視している所は見あたらない。唐の王涯の『說玄』にいたり、それが問題點であることがはじめて意識され、まずは素朴な解決が圖られた。

> 或るひと曰く、「玄の辭は九有るに、玄の位は四有るとは何の謂いぞや」と。曰く、「四位を觀て以て其の性を辯ずるなり。柔剛を以て推して贊の辭、別に否臧を以てす。是の故に四位、列を成して性、其の中に在り。九虛旁通して情、其の中に在り」と。（「明宗一」）[13]

しかし、この王涯の説明は、首・贊の本質的な數理關係―つまりなぜ四畫に九贊が對應するのか―に踏み込むものではなく、性情論的な觀念的説明に止まるものであった。そして宋に至り、司馬光が「首と贊とは道を分かち、行、相因らざるなり」とすることによって、「首」と「贊」とを一貫した構造と見るのではなく、別系列のものとする見方をうち立てることになる。司馬光のこの主張は、首・贊における「四」と「九」との數理の具合の惡さに基づくものであり、もう少しいえば、司馬光自身は「易と太玄は大抵道同じくして法異なる」（「説玄」）としつつも、『易』の卦・爻關係と同じような方法で首・贊關係を捉えようとした發想に因ったためであったと思われる。だが、宋の孫明復が「且つ太玄の易爲るや、猶お四體の一支のごとし。何を以て之を易に準う者と謂わん」（「辨揚子」『孫明復小集』[14]）と氣づいていたように、『太玄』[15]の構造には根本的に從來の『易』とは異なるものがあったのである。[16]

二　『太玄』の位層構造と數理構造

さて、『太玄』の構造に關する從來の研究は、司馬光の見解と同樣の認識に基づくか、あるいはそれを前提とした上でのものであった。だが、果たして『太玄』の首と贊は、本當に別構造であるのだろうか。

『太玄』は表面的には『易』の卦爻形式に似ているが、實は、極めて獨創的な構造に基づいて構成されている。『漢書』揚雄傳に「玄首四重なるは、卦に非ざるなり、數なり」とあるが、ここに言うように、やはり玄首四畫の「方州部家」および九贊はすべて「數」、すなわち數理に基づいて理解されなければならないのである。そこで、まず玄圖篇に引く次の文の檢討から始めることにする。

（一）首・贊の位層構造

その玄圖篇の文とは、

一は三を以て起こり、一は三を以て生ず。

というものである。これは、萬物の生成運動における根源の一玄に內在する三進法的メカニズムを、二つの角度から捉えたものである。二つの角度とは、首・贊が別構造という意味ではなく、一構造としての首・贊に對して二つの視點から見るという意味である。

まず、「一は三を以て起こる」であるが、その文の直後に「三を以て起こるとは、方州部家なり」との説明がある。これは一玄の三進法的な展開を方・州・部・家の四位に展開させる、玄の理念的形體を示すものといえる。このことについて『漢書』揚雄傳は次のように述べている。

其の用うるや天元より一晝一夜、陰陽數度、律曆の紀を推し、九九をもって大いに運らし、天と終始す。故に玄に三方、九州、二十七部、八十一家、二百四十三表、七百二十九贊あり。分かちて三卷と爲し、一二三と曰うは、泰初歷と相い應ず。亦顓頊の曆に有るなり。[16]（『漢書』揚雄傳下）

すなわちこれは、『太玄』は、一玄・三方・九州・二十七部・八十一家・二百四十三表[17]・七百二十九贊と三進法的に展開していることを示すものであり、[18]併せて方・州・部・家・表・贊という位層において、八十一首の構造を表したものである。すなわち、根源的な存在者一玄[19]を起點に、各段階が「三」という定數によって生成・秩序づけられているのである。『太玄』玄圖篇の冒頭にも、「一玄、都べて三方を覆い、方、九州を同にし、枝れて庶部を載せ、分れて群家を正し、事、其の中に事とす」[20]と、これとほぼ同樣の文が記されている。この三の

定數による展開は、いうまでもなくすでに指摘されているように、前漢の太初暦の八十一分法の數理における三の倍數系列の根本性と深く關係するものである。[21]

これら揚雄傳・玄圖篇に基づいて、今それを圖式化すると、一玄から次第に擴散していく次の圖1のようなピラミッド型の構造圖が成立する。[22] この構造は揚雄によると、また君主を頂點とした理念的な官制・政治秩序を表すものでもあった。[23]

このような『太玄』の構造は、方州部家の四つの位層において構築された、いってみれば表層的・形式的な面からの構造である。從來の研究は、八十一首の構造はまさにこのような四つの位層に基づく形式に主眼があるものと見、一方、七百二十九の贊はむしろ具體的な暦法の數値に基づいて構築されたものとしてきた。そのため、八十一首と七百二十九贊の間には構造的に直接的な關りはないとしてきたのである。八十一首が方州部家の四位の形式において構築されたものであり、それがその一つの本質を示すのは確かである。だが、八十一首は單に形式的構造に止まるものではない。八十一首の下には七百二十九贊が付せられている。その事實は、兩者が無關係あるいは別系列のものではない事を示している。というよりもむしろ、實は、兩者は數理的にもきわめて有機的密接な關連をもっているのである。次にこれについて檢討する。

(二) 首・贊の數理構造

そこで、玄圖篇の「一は三を以て生ず」の文である。玄圖篇はこの

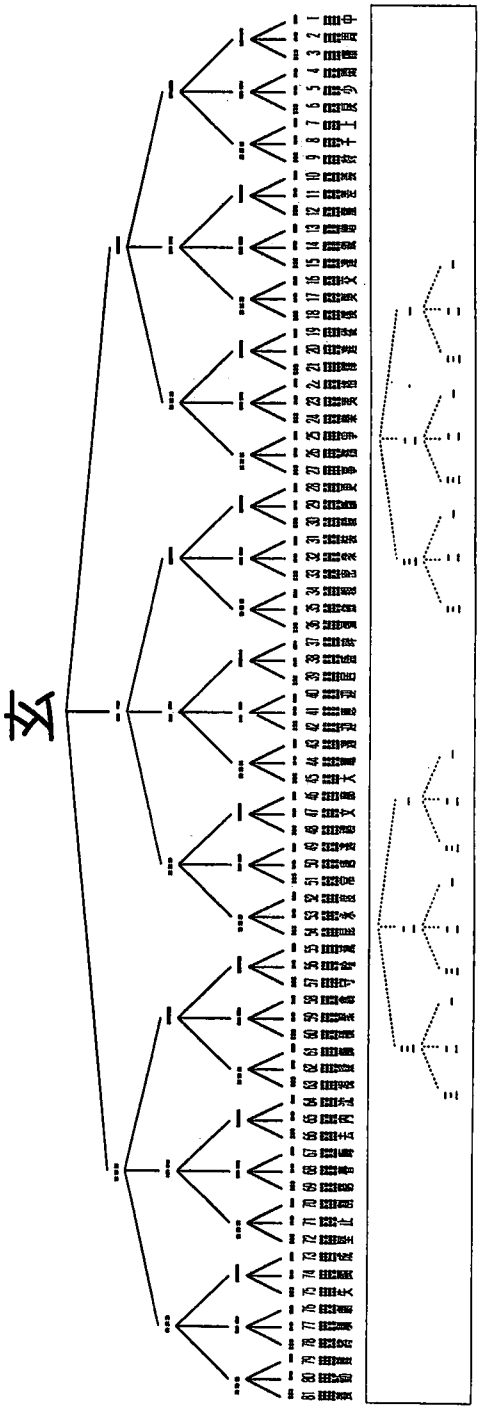


圖1

文に續けて、

三を以て生ずるは陽氣を參分して以て三重と爲し、極まりて九營と爲す。[24]

と述べている。これがどのような數理關係を意味するのかについて、以下少し詳細に追ってみる。まずこの文に對して范望は「三を以て九を成す。玄に九位有り」と注している。この注は、陰陽消長のメカニズムを三進法的に表現したものであるが、「九營」についてまた范望は「營は猶お虚のごとし。易に六虚有るが故に、玄、三變して九虚と爲すなり」とする。つまり『易』の一卦六爻の六位（六虚）に對して、一首九贊が對應していると見ているのである。しかし、『太玄』における「九虚」は各首の位に對應するものではなく、そして各首の位とは關係なく、八十一首全體にわたって張り巡らされているのである。その點について、次の玄攡篇を見てみよう。

天地位を奠め、神明氣を通ず。一有り二有り三有り。位各々輩を殊にす。九區を回行し、終始連屬、上下隅無し。[25]（玄攡篇）

天地萬物は、一（天）二（地）三（人）の三位をもって生成し、それによって貴賤の類を異にする。そして、生成した宇宙のありとあらゆる事物は、常に九區（九虚）の位の間を循環周流し、限りなく終始を繰り返すものである、という。つまり、萬物の生成は一二三の三位において行われ、變化・運動は常に九虚の間において行われるというのである。生成の三位である天地人は空間的方向性を意味するが、變化・運動は時間と密接に關連する。『太玄』においては一年の時間的メカニズムは、

凡そ十有二の始、群倫緒を抽く。故に一二三有りて以て絓け以て羅ぬ。玄術もて之を瑩かにす。鴻いに五行に本づき、九位施重、上下相因る。醜、其の中に在り。玄術もて之を瑩かにす。[26]（玄瑩篇）

と、三緒九位に組み込まれている。すなわち、『太玄』は萬物の生成と運動（空間と時間）を「三」と「九」の關係において捉えているのである。宇宙のすべては「三」と「九」の二つの數の關係において捉えられるのである。從來、『太玄』の數理構造に關する研究において「三」と「九」は重視されつつも、しかし「九」は三進法的解釋の範疇に閉じこめられ、實際に「九」のもつ構造的意義は忘れられてきた。しかし、『太玄』の「首」と「贊」を構造的につなぐ動脈はこの「九」という數にあるのである。

そこで、先程の玄圖篇の「三を以て生ずるは、陽氣を參分して以て三重と爲し、極まりて九營と爲す」の文に戻る。この「九營」について、この文の直後に次のような説明がある。すなわち、

旁通上下して、萬物并さる。九營周流して、終始貞し。十一月に始り、十月に終る。九行を羅重し、行、四十日。[27]

と、一年の日數を九節の四十日[28]づつに分けた後、

誠、内有る者は、「中」に存す。宣べて出づるものは、「羨」に存す。雲行きて雨施すは、「從」に存す。節を變え度を易うるは、「更」に存す。珍光の淳全なるは、「晬」に存す。中を虚くし外を弘むるは、「廓」に存す。削退消部は、「滅」に存す。降隊幽藏は、「沈」に存す。性命を考終するは、「成」に存す。この故に一より九に至る者は、陰陽消息の計か。[29]

と記すのである。これは一年における陰陽二氣の消長變化を、九營すなわち九天のメカニズムによって説くもので、九天とは、玄數篇の「九天。一爲中天。二爲羨天。三爲從天。四爲更天。五爲晬天。六爲

廓天。七爲滅天。八爲沈天。九爲成天」によるものである。[30] ここで注目すべきはこれらの九天の名稱が、實は『太玄』の主要な首名に基づいているという事實である。主要な首とは、次のようなことである。『太玄』八十一首を順々に九グループに分けた時、それぞれのグループのトップに、中首、羨首、從首、更首、睟首、廓首、滅首、沈首、成首が來るのである（圖3・參照）。九天の名はそのトップに當たる首名にもとづいているのである。かくて一年の陰陽消息を示す九營は主に曆法の數理にかかわるとされてきた九贊との關係のみならず、九天のメカニズムを通じて首とも密接に結合していることになるのである。[31]

さてここで、『易』の六虛と、『太玄』の九虛との問題にもう一度注目する。范望が述べていたように玄瑩篇の「九營」は繫辭下傳の「六虛に周流す」の「六虛」に一應當たるものとはいえる。しかし『易』の「六虛」は一卦六爻內にとどまるものにすぎなかった。[32] なぜなら、卦全體の數である六十四は、六（虛）によって割り切れないからである。これに對して『太玄』の「九虛」は、玄攡篇に「九區を回行し、終始連屬、上下隅無し」としていたように、一首九贊の構造をさらに八十一首全體に擴張させ、個々の一首九贊と全體の八十一首七百二十九贊が連續的・有機的なメカニズムの中で周流運動するように組み上げられたものである。これは『易』の六虛が個別の卦內に止まり、六十四卦全體とは斷絶していた關係を、全體と個とを有機的關係において構築し直したものであったと言えるだろう。『太玄』は數の合理性を極めて、『易』の構造的缺陷を補正したものでもあったのである。

以上のことから『太玄』八十一首の構造には九區・九營などに示される「九」という數が深く關わっていたが、それではこの「九」は、三進法とどのような關係をもっているのだろうか。それが次の問題である。

『後漢書』張衡傳注に引く桓譚の『新論』に、次のように言う。

玄經三篇、天地人の道を紀むるを以て三體を立つるに上中下有るは禹貢の三品を陳ぬるが如し。三三にして九、因りて九九を以て八十一なるが故に八十一卦と爲す。四を以て數と爲すは、數、一從り四に至るまで、重累變易し、竟に八十一にして徧くするに損益す可からざるなり。三十五蓍[33]を以て之を揲う。[34]

この『新論』の八十一首は、「三三にして九、因りて九九を以て八十一」と、「四を以て數と爲すは、數、一從り四に至るまで、重累變易し、竟に八十一にして徧くす」との、二種の數式によって捉えられている。すなわち、「$3^2 \times 9$（3^2）＝81」と「4^3＝81」である。この兩者は抽象的數學として見れば共に八十一が得られるという點で等價である。ただ兩數式の根底にある數値に注目した場合、前者は「三」と「九」を基本とするが、後者は「三」が絶對的な基數である。そして後者はまさに從來のピラミッド構造の數理に他ならない。一方、前者は、すでに見てきたように首と贊の構造に對應する。そこでここでは、前者に重心を置いて論を進める。玄告篇に次のように言う。

玄一摹して天を得。故に之れを有天と謂う。再摹して地を得。故に之れを有地と謂う。三摹して人を得。故に之を有人と謂う。天三據して乃ち成る。故に之を始中終と謂う。地三據して乃ち形わる。故に之を下中上と謂う。人三據して乃ち著わる。故に之を思福禍と謂う。下欲上欲、九虛に出入し、小索大索、九度に周行す。[35]（玄告篇）

根源たる玄は三摹によって天地人の三玄を成すが、それらの三玄は

さらに三據、つまり「天」には始中終という時間的三つの段階、「地」には下中上という空間的三つの段階、「人」には思福禍という人事的三段階があり、それを經て、始めて實體的天地人、つまり天・地・人における九虛（九天・九地・九人）が形成されることになる。そのうち、天における九虛、つまり九天の時間的メカニズムに關しては、玄圖篇の次のような部分に明確に示されている。

始なるかな、中羨從。……中なるかな、更睟廓。……終なるかな、滅沈成。[36]

この文は、中・羨・從・更・睟・廓などの九天を「始」「中」「終」という、三つの時間的カテゴリー（三據）に收束整理したものといえる。そしてこれら中・羨・從などの九天と、始中終の三據との關わり方については、唐の王涯が、次のように述べている。

天の道を立つるに始中終有り。因りて之を三にす。故に始始・始中・始終及び中始・中中・中終及び終始・終中・終終なり。地の道を立つるに下中上有り。人の道を立つるに思福禍有り。三三相乘ずるは猶お終始のごとし。以て九贊の位を立てて以て天地の數を窮めて以て三流の元に配す。故に玄の首めなり。[37]（「明宗一」『說玄』）

これは、天地人の三玄は各々の「始中終」「上中下」「思福禍」のカテゴリーを「三三相乘」じて、つまり交互に掛け合わせて、九贊、つまり九虛を表すとするものである。このような三據を乘じて九虛を見出す方法は、實はすでに『太玄』玄瑩篇にも見えている。

夫れ一一は「始」に摹いて深きを測る所以なり。三三は「終」を盡して崇を極むる所以なり。二二は事に參して「中」を要むる所以なり。[38]

ここでは、天の時間的段階としての「始中終」が「一二三」の三數に當てられていることに注意し、この「一一」「二二」「三三」の表現と、次の司馬光の言を參考にしてみる。

言うこころは、玄の事辭、此くの如く贊の九度を表す。一一、一二、一三、二一、二二、二三、三一、三二、三三。一一は初なり。三三は上なり。二二は中なり。此れ自然にして損益す可からざるの約なり。策數に象るなり。[39]

すると、「一一」「一二」「一三」……「三二」「三三」という贊の九度は、實は一二三の組み合わせから導かれるものであり、玄瑩篇の「一一……二二……三三」は、この一二三の組み合わせによる贊の九度を集約して表したものということが理解できる。これについては范望も「一一は黃泉於り起こるが故に始と爲す。……三三は九贊の終なるが故に終を盡すを言うなり。……二二は五を謂うなり」と、同樣の趣旨を述べている。

ところで、このような組み合わせの方式が、いずこに由來するものであるかについて、司馬光は「策數に象るなり」と述べている。つまりこの方式は太玄易の策數の運用に擬えたものであるとするのである。范望も玄圖篇の「玄に六九の數有り。策は三六を用い、儀は二九を用う。玄、其れ十有八用なるか」（玄圖篇）に注して「三六にして十八なり。蓋し一一、一二、一三、二一、二二、二三、三一、三二、三三なるの數を取りて以て十八策と爲すなり」[40]と述べ、やはり策數に由るものとしている。

『易』の筮法が四本ずつ數える四拂いであるのに對して、太玄易の筮法は、「其の餘を中分し、三を以て之を搜むる」（玄數篇）と、つまり天地に象って左右に中分した兩策を、天地人に象って三本ずつ數え

る三拂いである。すると、左右の殘策數は、一か二か三（最後の三も殘策と見る）のいずれかに當たる。玄瑩篇の「一一……二二……三三」における九度・九贊とは、『太玄』の占筮的性格から考えた場合、おそらく三拂いによる殘策數の組み合わせに象ったものと言えるのではないか。しかしこの點については、決定的なことはわからない。ただ『太玄』の基本構造を示す、これらの九位が、司馬光・范望の指摘する策數に象ったものであるならば、吳の陸績が「夫れ玄の大義は揲蓍の謂」（「述玄」）と言っているように、『太玄』の占筮的性格がその構造の基幹にも反映されていたと言ってよいであろう。

〈圖2〉九天・九地・九人の對應關係

一二三	九贊	九天	九地	九人
(3, 3)	上九	(終、終)	(上、上)	(禍、禍)
(3, 2)	次八	(終、中)	(上、中)	(禍、福)
(3, 1)	次七	(終、始)	(上、下)	(禍、思)
(2, 3)	次六	(中、終)	(中、上)	(福、禍)
(2, 2)	次五	(中、中)	(中、中)	(福、福)
(2, 1)	次四	(中、始)	(中、下)	(福、思)
(1, 3)	次三	(始、終)	(下、上)	(思、禍)
(1, 2)	次二	(始、中)	(下、中)	(思、福)
(1, 1)	初一	(始、始)	(下、下)	(思、思)

↑位

以上をまとめると、玄瑩篇の「一一」「二二」「三三」とは、『太玄』の九位を一二三の三數の組み合わせによって集約的に表したものであり、それらを一から九に推した場合、まず、「一一」は「一」に當り、「一二」は「二」、「一三」は「三」、「二一」は「四」、「二二」は「五」、「二三」は「六」、「三一」は「七」、「三二」は「八」、「三三」は「九」に對應することになる。さらに、また、玄瑩篇本文では、「一一」「二二」「三三」が「始」「中」「終」の時間的カテゴリーに對應していたが、司馬光はこれを、「初」「中」「上」という空間的なカテゴリーに置き換えて解釋していた。このように一二三の組み合わせによる九つのペアは、九天・九地・九人（時間・空間・人事）のカテゴリーに對應することになる。その對應關係をまとめると、圖2のようになる。

圖2の一番左側の、一二三の三數の組み合わせでは、必然的に九つの位が生ずるが、これは九贊の「初一」から「上九」に對應する。それはまた九天・九地・九人における時間・空間・人事のカテゴリーの組み合わせにも對應することになる。これを逆に言えば、九天・九地・九人などにおける事柄の性格、つまりその具體的な概念性を排除すれば、すべてが一二三の三數に抽象化されるということでもある。このことは、王涯も「以て九贊の位を立てて以て天地の數を窮め、以て三流の元に配す。故に玄の首めなり」（「明宗」『說玄』）と述べている。これは天地萬物の生成運行をすべて「三」と「九」の歸納・演繹的な數理關係によって說明しうるということなのである。それでは、次にこの「三」と「九」が、『太玄』八十一首七百二十九贊の全體の中で、具體的にどのような機能を果たしているのかについて見てみる。

三　重卦と重數

『太玄』では、すべての事柄について、九つの區畫が設定され、「九」と「三」が整合的な關係の中で結びつけられていたのは、これまで述べた通りである。すなわち、數「九」は、一二三の三つの數を基本單位とし、それらを交互に組み合わせた結果、必然的に導かれる極數であった。この考え方に基づいて、『太玄』の八十一首の配列を組み直すと圖3のような配列になる。

明の葉子奇は『太玄本旨』原序の中で次のように述べている。

〈圖3〉　八十一首の配列

縦＼横	(1.1)	(1.2)	(1.3)	(2.1)	(2.2)	(2.3)	(3.1)	(3.2)	(3.3)
(1.1)	1 中	10 羨	19 從	28 更	37 睟	46 郎	55 減	64 沈	73 成
(1.2)	2 周	11 差	20 進	29 斷	38 盛	47 文	56 唫	65 內	74 閼
(1.3)	3 礪	12 童	21 釋	30 毅	39 居	48 禮	57 守	66 去	75 失
(2.1)	4 閑	13 增	22 格	31 裝	40 法	49 逃	58 龠	67 晦	76 劇
(2.2)	5 少	14 銳	23 夷	32 衆	41 應	50 唐	59 聚	68 閼	77 馴
(2.3)	6 戾	15 違	24 樂	33 密	42 迎	51 常	60 積	69 弼	78 將
(3.1)	7 上	16 交	25 爭	34 親	43 遇	52 度	61 飾	70 劃	79 難
(3.2)	8 千	17 夏	26 務	35 斂	44 竈	53 永	62 疑	71 止	80 勤
(3.3)	9 紂	18 倭	27 事	36 彊	45 大	54 昆	63 視	72 堅	81 養

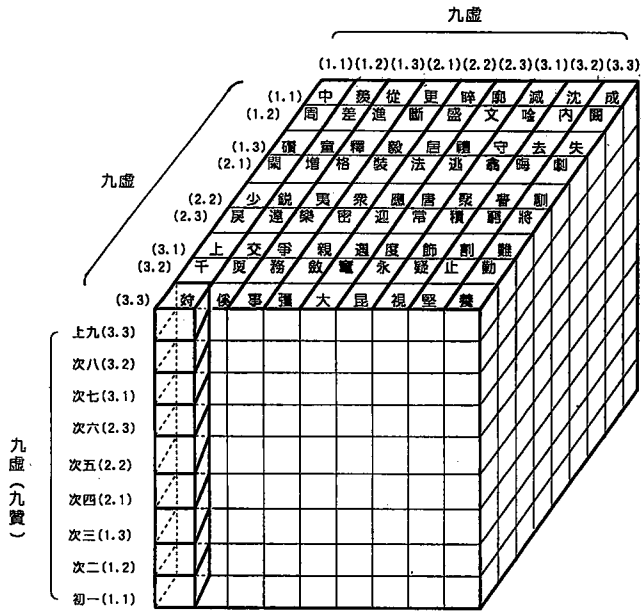
易の畫たるや、則ち下自り而して上、前自り而して後なり。☳☶☵☳☶☵☳☶の八卦を以て、一貞八悔にして互いに之を重ぬ。故に其れ窮まりて六十四卦を爲す。玄の畫たるや、則ち上自り而して下、內自り而して外なり。☰☲☴☱☷☵☶☳の九首を以て、三部三家にして互いに之を重ぬ。故に其れ窮まりて八十一首を爲す。此れ易と玄は取りて同じからざるの効を用うるなり。[41]

葉子奇は、『太玄』の八十一首の配列を『易』の重卦の方式によって考えている。つまり、『易』の六十四卦は、八卦（三畫）を基本としてこれを重ね、八八六十四卦が構成される。一方、『太玄』の八十一首も同様にして九九八十一首が構成されるとするのである。すると、『太玄』の首四畫は、上下を分けた二畫が基本を成すことになる。そしてその二畫は一二三の數の組み合わせによる九ペアのいずれかに當たることになる。玄の四畫とは、この二畫のペア、つまり數の組み合わせを上下に重ねたものということになるわけである。いわば「重畫」の方式である。『漢書』揚雄傳に、「玄首四畫は卦にあらず、數なり」とするのも、そのような意が込められたものと見ることもできる。圖3の八十一首配列表は、まさにこういった方式に基づいているのである。つまり、「一二三」を二つずつ交互に組み合わせてゆけば、「一一一」（☰）「一一二」（☲）「一一三」（☶）…「三一一」（☴）「三二二」（☵）「三三三」（☷）などの九ペアが必然的に得られるが、これを縦と横に置く。そして、それらを再び交互に重ねてゆくと、その結果、まず一番最初の中首（☰☰）「一一一一一一一一一」、次の周首（☰☲）「一一一一一一一一二」、そして礪首（☰☶）「一一一一一一一一三」というような組み合わせの順序となり、最後は「三三三三三三三三三」という、八十一番目の養首（☷☷）が成立するのである。そしてこの配列方式は桓譚が「三三にして九、因りて九九を以て八十一卦と爲す」（『新論』）としていた論理とも完全に一致しているのである。[42]

そしてこのことはさらに、本稿の冒頭で取り上げた一首四畫に對する九贊の問題解明の決定的關鍵ともなるものであった。すなわち、「一二三」の組み合わせの方式によれば、八十一首と七百二十九贊の構造はすべて、次の圖4のような構造に集約することができるからである。

圖4は、八十一首七百二十九贊の構成において、先程の九區を枠組みとした八十一首の配列（圖3）に、各首における九贊を三次元方向に組み立てたものである。各首の上下二畫（縦と横）の配列と九贊が、

〈圖 4〉　太玄八十一首七百二十九贊構造圖



すべて一二三の三數の組み合わせによる順列から成り立っていることが一目瞭然であろう。そしてそれが、構造のすべてにわたって「九位」、つまり「九虛」を基本的枠組みとして構築されていることも明確であろう。すなわち『太玄』における一首四畫と九贊の關係は、まさにこのような數理による統一的方式にもとづく必然的な結合形態だったのである。そしてこの首贊構造の意味を思想史に投影するならば、前漢の律曆思想において基本定數とされた「三」と「九」とを、究極的にまで統一的かつ整合的に驅使したシステムの構築であったといえるだろう。『太玄』玄首篇は次のように言う。

方州部家、三位疏いに成る。曰に其の九九を陳ね、以て數、生ずと爲す。贊は羣綱を上げ、乃ち名に綜ぶらる。八十一首、歲事咸く貞し。[43]

おわりに

『太玄』が『易』に擬して作られた書物であるという事實から考えれば、首と贊がなぜ卦爻のように簡單に對應していないかとの古くからの疑問は、當然のものであったといえよう。四贊でなくてなぜ九贊なのか。「首」と「贊」は『太玄』の根幹的骨組みであるだけに、この疑問の解決される必要性は高かったはずである。だが宋の司馬光になって、ようやくこの問題に一つの回答が與えられたものの、彼は「首と贊とは道を分ちて、行、相因らざる者なり」とし、さらに兩者の關係を、

故に八十一首を以て其の名を擧上し、其の誼を區別して炳然として殊に散ぜしむ。網の綱に在るに、條有りて紊れざるが若し。[44]（玄首篇注）

としたのであった。すなわち、司馬光は、首は九贊の屬する表面的な區畫の名稱であると理解したのである。しかし、このような彼の理解は氷山の一角を眺めたものに過ぎなかった。彼は海面下にある、根本的な數理的整合關係までを見て取れなかったのである。そして彼によって首と贊が數理的には直接的に關わらないものとされてより以

降、近年の研究に至るまで、この司馬光の見解は、陰に陽にその呪縛力を振るい續けてきたのであった。

本稿において述べたことは、そうした司馬光の見解に對して、『太玄』の「首」と「贊」は別構造でも何でもなく、一貫した統一的な數理・方式に基づいて構築されたものであり、極めて整合的な構造を持つものであるということであった。そしてそのような『太玄』とは、前漢律曆思想の基本定數である「三」と「九」を極限的に展開したものであり、さらに、前漢象數易學の課題であった律曆思想と易學の結合問題に對して、精製された結晶のような解答を與えるものであったということができるだろう。

注

(1) 『太玄』制作に至る背景として前漢易學の理論的問題點を指摘する論考は、町田三郎『秦漢思想史の研究』(創文社、一九八五) 三一一頁～三一四頁。

(2) 『四庫提要』(子部術數類『太玄經』) に「雄書本擬易而作、以家準卦、以首準彖、以贊準爻、……全仿易古本、經傳各自爲篇」とある。『易』と『太玄』の具體的な類似性に關しては、司馬光の「說玄」(司馬光『太玄集注』所收) および本田濟『易學―成立と展開』(平樂寺書店、一九七七) 一八〇頁～一八六頁。

(3) 『太玄』著作の目的に漢代の律曆思想の數理と易學の思想の統一を圖る意圖があったことについては、堀池信夫『漢魏思想史研究』(明治書院、一九八八) 一六九頁以下。なお、『太玄』の易學說史的・思想史的意味については町田三郎『秦漢思想史の研究』三〇一頁～三三四頁。

(4) 川原秀城「『太玄』の構造的把握」(『日本中國學會報』第三四集、一九七八)、のち『中國の科學思想』(創文社、一九九六) 一九六頁以下。堀池信夫『漢魏思想史研究』一六九頁～一七九頁。

(5) 『津田左右吉全集』第十六卷『儒教の研究』(岩波書店、一九六五) 一六九頁～一七〇頁。

(6) この問題に對して、鈴木由次郎氏は、四重と九贊とは形式と作用との關係にあるとし (『太玄易の研究』(明德出版社、一九六四) 四五頁～四六頁)、川原秀城氏は、「首」と「贊」の兩構造は理念と運動という異質の系列を成すものであり、前者は、一年における陰陽消息という天の理念を說明するもの、後者は、數値的に天の運動を說明するものであるとする。理念 (形式)、運動 (作用) という面から、鈴木氏の見解に近似するものと思われる (『太玄』の構造的把握)

(7) 司馬光「說玄」(『太玄經集注』所收) は、彼が『太玄經集注』を著す前の慶曆年間に數種の舊注を蒐集して著した論文である。司馬光の「說玄」の他に、同じ題名で唐の王涯の『說玄』五篇 (范望注『太玄經』所收) があるので注意を要する。

(8) 司馬光の主張をもう少し詳細に記すと、次のようである。「本傳に曰く、『雄、渾天を覃思し、三摹して之を四分すれば八十一に極まる』、とは、玄首を謂うなり。又曰く、『旁らに則ち三摹九据して七百二十九贊に極まる』、とは玄贊を謂うなり。首は猶お卦のごときなり。贊は猶お爻のごときなり。又曰く、『易を觀るは、其の卦を見て之に名づく。玄を觀るは其の畫を數えて之を定む。玄首四重なるは卦に非ざるなり、數なり』、と。故に易卦六爻、爻に皆な辭有り。玄首、四重なるも別に九贊を爲して以て其の下に繫く。然らば、則ち首と贊とは道を分ちて、行、相因らざる者なり」

(9) 司馬光以後、蘇洵も「太玄論」(『嘉祐集』卷八) を著し、「故に二者 (首・贊) 竝び行わるるも其の用は各々異なるなり。易の六畫以て六爻の辭に應ずること有るが如きに非ず」と、やはり首と贊は互いに別の作用を爲すものと述べている。このように首と贊の別構造說は、司馬

光以來、その後の學者に共通の認識として定着していったように思われる。

(10) 例えば、毅首（𝍌）の場合、上位から二方・一州・一部・三家と呼び、聚首（𝍍）の場合は三方・一州・二部・二家と呼ぶ。

(11) 夫易爻以立卦、辭以明爻。故爻有六而辭亦六。今玄晝有四而贊辭反九。是上無所明、下無所屬。首自首、而贊自贊、本末二致。此求而未通者、三也。

(12) 漢魏六朝の文獻的諸問題については、鈴木由次郎『太玄易の研究』八四頁～九四頁。

(13) 或曰、玄之辭也有九。玄之位也有四、何謂也。曰觀乎四位、以辯其性也。推以柔剛、贊之辭也。別以否臧。是故四位成列、性在其中矣。九虛旁通、情在其中矣。

(14) 且太玄之爲易、猶四體之一支也。何以謂之準易者乎。

(15) 揚雄は六十四卦と八卦・六爻などの易における表面的數値にとらわれず、易の二進法の數理的本質に切り込み、三進法にもとづいて『太玄』を再構成しようとしたこと（堀池信夫『漢魏思想史研究』一七四頁）や、首・贊辭の關係や内容から（町田三郎『秦漢思想史の研究』三一六頁～三二〇頁）、『易』とは異なる發想のもとにあるといえる。

(16) 其用自天元推一晝一夜陰陽數度律曆之紀、九九大運、與天終始。故玄三方九州二十七部八十一家二百四十三表七百二十九贊、分爲三卷、曰一二三、與泰初曆相應、亦有顓頊之曆焉。

(17) 揚雄傳に記す「二百四十三表」とは、『太玄』の方州部家及び九贊という構造の中で實際にはどのような位置にあるものであろうか。『太玄』の本文には「二百四十三表」という明文はない。ただ、玄數篇に「贊贏入表、表贏入家、家贏入部、部贏入州、州贏入方、方贏則玄」と、「贊」の次の段階に「表」を位置づけている。この「表」について范望注は、「一五七則爲一表、三四八爲一表、二六九爲一表。且中夕、各有所用。故贊滿而入三表。表者、見其休咎也」という。つまり一首の九贊を三に分けると一首三表になり、八十一首全體においては二百四十三表（81首×3表）が算出されるとするのである。揚雄傳の「二百四十三表」はこうした把握によるものと考えられる。

(18) 『太玄』の三進法的數理構造を考察したものとして川原秀城「『太玄』の構造的把握」、堀池信夫「三進法の世界觀」（『漢魏思想史研究』一六九頁以下）がある。特に堀池氏の論考は、前漢思想史における經學と律曆思想との間にある張り詰めた數理的緊張關係に主要な視點を置いている。

(19) この「玄」の概念が『老子』の「玄」の思想に基づくものであることはしばしば指摘されてきた。狩野直喜「楊雄と法言」（『支那學』第三卷第六號、一九二三）、津田左右吉『津田左右吉全集』第十六卷『儒教の研究』一七〇頁、鈴木由次郎『漢易研究』（明德出版社、一九七四）四〇六頁、町田三郎『秦漢思想史の研究』三二六頁～三三四頁。

(20) 一玄都覆三方、方同九州、枝載庶部、分正群家、事事其中。

(21) 『太玄』の八十一首という基本數値は、「章會統元」（玄圖篇）と、一元三統八十一章という三統曆（太初曆）の基本定數に基づくものであり、また律管黃鐘の數値に合致するものである。一方、七百二十九贊も「兩贊一日」の原則により、七百二十九贊を一年の三百六十四日半の日數に當てられる（729÷2＝364.5）。『太玄』の八十一首七百二十九贊の數理構造と前漢の太初曆との關連については、川原秀城「『太玄』の構造的把握」がある。

(22) この圖1は、もと明の葉子奇の『太玄本旨』卷首に收められていたものを、川原秀城氏が「『太玄』の構造的把握」に修正引用したものに、訂正を加えたものである。

(23) 玄瑩篇に「方州部家、八十一所、下中上を晝し、以て四海を表す。玄術もて之を營かにす。一辟、三公、九卿、二十七大夫、八十一元士、少

なければ則ち衆を制し、無なれば則ち有を治む。玄術もて之を營かにす」と、八十一首を國家の官制に擬して說いている。『禮記』王制篇に「天子は三公、九卿、二十七大夫、八十一元士なり」とあり、また『春秋繁露』「官制象天」には王制篇の論理をさらに强固にした形が表れている。『太玄』の方・州・部・家の八十一首の構造はこうした從前の理念的官制を襲ったものである。

(24) 以三生者、參分陽氣、以爲三重、極爲九營。

(25) 天地奠位、神明通氣。有一有二有三。位各殊聟。回行九區、終始連屬、上下無隅。

(26) 凡十有二始、群倫抽緒。故有一二三、以絓以羅。玄術營之。鴻本五行、九位重施、上下相因。醜在其中。玄術營之。

(27) 旁通上下、萬物并也。九營周流、終始貞也。始於十一月、終於十月。羅重九行、行四十日。

(28) 實際は四十日半だが（364.5÷9＝40.5）、その整數の四十日を擧げて九行としたものである。

(29) 誠有內者、存乎中、宣而出者、存乎羨、雲行雨施存乎從、變節易度存乎更、珍光淳全存乎睟、虛中弘外存乎廓、創退消部存乎減、降隊幽藏存乎沈、考終性命存乎成。是故一至九者、陰陽消息之計邪。

(30) 玄數篇には「九天」の他にも「九地」「九人」「九體」「九屬」などが擧げられ、天地人すべての事柄を九區に割當てているのが確認される。

(31) 八十一首における「九天說」を指摘する論考はいくつかある（鈴木由次郎『漢易研究』四〇〇頁～四〇四頁、鄭萬耕『太玄校釋』（北京師範大學出版社、一九八九年二月）「前言」）が、いずれも卦氣說の陰陽消息觀によるのみで首贊構造には關說していない。

(32) 『太玄』が、卦の個別性を本來とする『易』の盲點を拂拭し、全體との關わり・連續性を保持しているという指摘は、町田三郎『秦漢思想史の研究』三一九頁。

(33) 「三十六蓍」の誤り。

(34) 玄經三篇、以紀天地人之道、立三體有上中下、如禹貢之陳三品。三三而九、因以九九八十一、故爲八十一卦。以四爲數、數從一至四、重累變易、竟八十一而徧、不可損益。以三十（五）〔六〕蓍揲之。

(35) 玄一摹而得乎天、故謂之有天。再摹而得乎地、故謂之有地、三摹而得乎人、故謂之有人。天三據而乃成、故謂之始中終。地三據而乃形、故謂之下中上。人三據而乃著、故謂之思福禍。下欲上欲、出入九虛、小索大索、周行九度。

(36) この部分の全文は以下の通りである。

始哉、中羨從。百卉權輿、乃訊感天。雷推厥奮、輿物旁震。寅贊柔徼、拔根于元。東動青龍、光淵離于淵、催上萬物、天地輿親。中哉、更睟廓。象天重明。雷風炫煥、與物時行。陰酋西北、陽尙東南。內雖有應、外觝亢貞。龍翰于天、長類無躔。南征不利、遇崩光。終哉、減沈成。天根還向、成氣收精、閱入庶物、咸首艱鳴。深合黃純、廣含羣生。泰柄雲行、時監地營。邪謨高吸、乃馴神靈、旁該終始。天地人功、咸酋貞。

(37) 立天之道、有始中終。因而三之。故有始始・始中・始終及中始・中中・中終及終始・終中・終終。立地之道、有下中上。立人之道、有思福禍。三三相乘、猶終始也。以立九贊之位、以窮天地之數、以配三流之元、故玄之首也。

(38) 夫一一、所以摹始、而測深也。三三、所以盡終、而極崇也。二二、所以參事、而要中也。

(39) 言、玄之事辭、如此表贊九度。一一、一二、一三、二一、二二、二三、三一、三二、三三。一一初也。三三上也。二二中也。此自然不可損益之約也。象策數焉。

(40) 三六十八。蓋取一一也一二也一三也二一也二二也二三也三一也三二也三三也之數、以爲十八策也。

(41) 易畫則自下而上、自前而後、以䷀䷁䷂䷃䷄䷅䷆䷇䷈䷉䷊䷋䷌䷍䷎䷏䷐䷑䷒䷓䷔䷕䷖䷗䷘䷙䷚䷛䷜䷝䷞䷟䷠䷡䷢䷣䷤䷥䷦䷧䷨䷩䷪䷫䷬䷭䷮䷯䷰䷱䷲䷳䷴䷵䷶䷷䷸䷹䷺䷻䷼䷽䷾䷿ 八卦、一

貞八悔、而互重之。故其窮爲六十四卦。玄晝則自上而下、自內而外。以䷀䷁䷂䷃䷄䷅䷆䷇ 九首、三部三家、而互重之。故其窮爲八十一首。此易玄取用不同之効也。

(42) この上と下を重ねる方式は、『易』の傳統的配列方式である重卦に基づくものである。重卦は六十四卦を三畫の八卦と八卦を相重ねて算出するもの、實際に一九七三年に中國長沙市より出土した『馬王堆漢墓帛書周易』の六十四卦の配列は、この重卦方式に基づく配列をなしている。

(43) 方州部家、三位疏成。曰陳其九九、以爲數生。贊上羣綱、乃綜乎名。八十一首、歲事成貞。

(44) 故以八十一首、擧上其名、區別其誼、炳然散殊。若網在綱有條而不紊。